

会 告

平成十三年年度史学研究大会および総会は、予定通り、十一月二日（金）午後一時より京大会館において開催されました。

公開講演は柏倉康夫、野澤秀樹の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

フランス・ミッテラン政権の

十四年

柏倉康夫

場所から空間へ、そして再び

場所へ

野澤秀樹

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、平成十三年度の会務報告がなされました。

平成十三年度

史学研究大会大会講演要旨

フランス・ミッテラン政権の

十四年

柏倉 康 夫

ミッテラン大統領は、一九五八年九月に始まった第五共和制にあつて、ドゴール、ポンピドゥー、ジスカール・デスタンと保守派から選ばれた三人に次いで、初めて社会党から選出された大統領であつた。彼が大統領の座にあつた十四年間に、東西冷戦が終わりを告げ、「ベルリンの壁」が崩壊し、ヨーロッパをめぐる状況は大きく変つた。その中で、ミッテラン大統領はヨーロッパの自立と安定に尽力し、ヨーロッパ統合に情熱を傾けた。しかし一方では、この十四年間でフランスの失業者は倍増し、自ら育てた社会党は、汚職疑惑から有権者の支持を失い、政権の最後は八一年に登場した当時の活力を失つていた。

ミッテラン氏に代わつて、保守派のシラク氏が次期大統領に選出された翌日、一九九五年五月八日は、第二次世界大戦が終つ

て丁度五十年目の日にあたり、パリとベルリンで、これを記念する式典が催された。パリでは凱旋門に特別のトリビューンがつけられ、アメリカのアル・ゴア副大統領、メジャー・イギリス首相、コール・ドイツ首相など五十か国以上の国の代表が出席して、式は華やかに行われた。そしてこの同じ日の夕方には、場所をドイツのベルリンに移し、ドイツがナチスの軛から解放された日を祝つた。ベルリンの式典は、加害者ドイツという立場を反映して、華やかな儀式は一切なく、当時のヘルツォーク大統領のスピーチにはじまつて、各国首脳がそれぞれ将来のヨーロッパについて語つた。そうした中で、ひととき注目されたのが最後に登場したミッテラン大統領の八分間に及ぶ演説であつた。

「皆さんのなかで私は、第二次大戦を兵士として戦つた数少ない一人です。当時二十五歳の若者が何を考えたかを知ることとは、皆さんにも興味のあることでしょう。このとき私は捕虜になりました」と、自らの体験から語り出したミッテラン氏の声は、確信にみちて説得力があつた。ミッテラン氏はさらに、「ドイツ兵は勇敢だった。誤つ

た信条のためだとしても、彼らの行為はその信条とは無縁だった。彼らが祖国を愛していたことを理解しなければなりません。ベルリンに來たのは私の最後の務めの一つです。私はここであなた方と一緒にいることを誇りに思います。祝うべきは、抑圧から自由を獲得した勝利であり、ヨーロッパがヨーロッパのために得た勝利です。ヨーロッパの政治は私のあとも、継続されていくでしょう。それは私以前に始まったのと同様です。ただ方法は変っていくでしょう。それは歴史の必然です。私達が作り上げたものは、継続されなければなりません。」

ミッテラン氏は、大統領としての最後のスピーチをこう締め括った。この最後のスピーチの中の「ドイツ兵は勇敢だった」という言葉をとらえて、「ファシズムに加担した行為は祖国愛によつては免罪されない」という批判も起つたが、自らの体験から、ヨーロッパの統合こそがヨーロッパに平和をもたらすと信じたミッテラン大統領の政治的遺言は、多くの人に感銘を与えた。

一九八〇年代から九〇年代半ばのフランスは、間違いなく「ミッテランの時代」で

あった。任期七年という世界でも他に例をみない強大な権力に支えられて、ミッテラン大統領は強いリーダーシップを発揮した。内政面では、二世紀にわたる中央集権を打破して、地方分権化を促進したことが特筆されるが、経済面では、成長をなし遂げられず失業が増え、挫折を味わった。ミッテラン政権の最大の貢献は外交面で、ヨーロッパに単一市場を実現させ、通貨統合を軌道に載せる推進役をつとめたことである。しかしドイツの再統一問題では、情勢の読み違いが少なくなく、結局主導権を握ることは出来なかったのも事実である。さらに旧ユーゴスラビア紛争の引き金になった、ドイツのいち早いクロアチア承認を阻止できず、この地域におけるフランスの主導権を危うくした。

ミッテランの政策については、彼の死後五年が経って、多くの内部資料の公表が始まっている。ソビエト連邦の崩壊、東ヨーロッパの民主化、ドイツ再統一、そしてヨーロッパ連合の誕生と、ヨーロッパが激動した時代の舵取り役としてのミッテラン氏の真の評価は、これから行われることになる。

(かしわくら・やすお 京都大学大学院文学研究科教授「二十世紀学」)

場所から空間へ、そして再び

場所へ

野澤秀樹

フランス古典地理学は、「場所の科学」として、「地域の個性」を記述してきた。ヴィゲル地理学の深い理解者であったF. ブローデルは、M. ソールの著書の書評の中で、地理学は、「社会の空間的研究」あるいは「空間による社会の研究」であると、その将来を暗示する方向性を示した。ブローデルの空間概念は如何なるものであったか。かれの代表作『地中海』では、「空間」は環境、克服すべき障害、距離などであり、フィジカルな意味で使われている。ブローデルの「空間」概念がもつともよく整理されている「物質文明」の最終巻「世界時間」において、有名な「世界経済」の概念が提示された。その構成は、チューネンの「孤立国」の「同心円モデル」で説明されると考えられている。遺著『フ

ランスのアイデンティティ」の第I巻「空間と歴史」では、古典地理学の「ペイ」や第二次大戦後の「都市・農村関係」や「都市網」の概念によって、フランスの歴史地理を説明している。プロードルの空間は古典地理学や、いわゆる理論計量地理学の空間概念であった。

理論計量地理学は、「地域の個性」を研究する「地誌学」を批判し、地理的現象の空間的配列を数学言語で形式化する「空間科学」を主張した。その空間の概念は、「均質空間」、「絶対空間」で、内容から切り離された独立した存在と考えられた。また社会は、諸個人の合理的選択の結果としての集合的社会であった。理論計量地理学はこうした諸概念を含み、論理実証主義の科学哲学に根拠をおく厳密な科学主義にたっていた。この実証主義地理学に対する批判とくに社会の実質を欠いた空間的形式化を批判するラディカル地理学者たちは、「社会・空間」を主題的に問題にする。

空間は、実証主義地理学が取扱うような、社会から切り離された独立の存在ではない。しかし「社会・空間」をどのような関係と捉えるかに地理学者は腐心してきた。「社

会・空間」を「弁証法的関係」と見る立場は、空間を「社会的に生産されたもの」と考える。これはこれまでの空間概念を一転させる画期的な概念であった。

この概念は、人文社会科学における「空間」の重要性をはやくから問題にしていたH. ルフェーヴルに負っている。かれは社会的に生産された社会空間の理論構築を試みた。その「社会空間」のプロブレマティクは、「生きられる空間」である。そして社会空間認識の三つの契機(次元)が提起された。(1)「空間の実践」、(2)「空間の表象」、(3)「表象の空間」がそれである。こうした枠組みにおいて、ルフェーヴルは、「身体と空間」、「絶対空間と抽象空間」、「社会空間のスケール」などの諸問題などを検討し、示唆的な文章を多く書き残している。

地理学者のD. ハーヴェイは、ルフェーヴルの刺激の下で「空間の生産」に関する独自の理論構築を行ってきた。ハーヴェイが社会的生産において空間の重要性を認識するにいたったのは、マルクスの「時間による空間の絶滅」という表現であった。これを導きの糸としてかれは、資本蓄積の地

理学を「建造環境」、「空間的回避」、「空間編成」といった空間概念で説明することができたのである。

ハーヴェイの以上の研究は、ルフェーヴルの都市研究段階の研究(「空間の実践」あるいは「空間の表象」の研究)を精緻に発展させたと言える。ルフェーヴルの「空間の生産」段階の研究、すなわち、「空間の表象」と「表象の空間」を問題する研究に相当するのは、ハーヴェイの『意識と都市の経験』(一九八五)や『ポストモダンティイの条件』(一九八九)である。とくに後者において、消費、文化による資本蓄積の高度化を論じ、その高度化を「空間・時間の圧縮」と捉えている。

現在かれはグローバル化の進む世界において、それに抵抗する「場所」の問題、「地理的差異」の問題に携わっている。ここにおいてわれわれは、今回脇に置いてきた「主体・空間」の立場と接近しているのを知るのである。今日、空間、場所、主体に関する議論は、「空間の表象」と「表象の空間」めぐる議論として地理学に限られず、広く人文社会科学の話題となっているといつてよい。